主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	冨塚　亮平

主論文題名　：

The Moment of Transition: Plasticity in Ralph Waldo Emerson's Writings

（変化の瞬間――ラルフ・ウォルド・エマソン作品における可塑性）

（内容の要旨）

序章　Plasticity and Emersonian Transcendentalism

本博士論文は、19 世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期を代表する作家・思想家ラルフ・ウォルド・エマソン(Ralph Waldo Emerson、1803-1882)の作品群において、自己と他者が構成する多様な関係性がいかなる形で表現されてきたのかを、硬直性と柔軟性を脱構築する「可塑性」(plasticity)という概念に主に焦点を当てることで再検討する。これまでのエマソン研究において、彼の多岐にわたるテクストを貫く一貫性は果たして存在するのか、もし一貫した体系やモデルが彼の思想を規定しているとすれば、それはどういったものなのか、という主題は、しばしば論じられてきた。しかし本論文は、体系の不在でも完結したモデルでもない、両者の中間に位置する、目的を固定せず常に変貌し続ける可塑的な体系こそをエマソンの思想に見出し、改めて評価する。絶えざる変容にさらされつつその都度、仮の同一性を確立していくようなエマソンの自己形成における「可塑性」を軸に「ジグザグの航路」や連続する「円」の比喩に喩えられるエマソンの文学的軌跡におけるさまざまな「変化の瞬間」(“the moment of transition”)を追うことで、最終的に本論文は、人間の限界を超越し、神やイデアの領域へと到達することではなく、日常的な経験の領域で対話と変化を継続することを目的とする、特異な「距離の詩学」に特徴づけられる思想を表現するものとして、彼のテクスト群に新たな光を当てることを目標とする。

序章ではまず、固有の目的を定めずに変化を続けるエマソン像を強調する先行研究として、Sacvan Bercovitch による「聖書予型論」(typology)と「嘆き」(jeremiad)の議論から、類似する視点を変形・発展させた、Stanley Cavell が提唱する「エマソンの道徳的完成主義」(Emerson's moral perfectionism)の思想へと至る系譜を概観する。続いて、エマソンの思想を固有の前提や目的へと帰属させない「反基礎づけ主義」として読み直す Cavell による解釈とも響きあう概念として、Catherine Malabou が提唱する「可塑性」の概念に注目する。彼女の言う「可塑性」はまず、語源である形づくるという意味のギリシャ語 *plassein* に対応するふたつの根本的な意味、すなわち「形を受け取る能力」と「形を与える能力」を同時に意味する。硬直性と柔軟性の二項対立を超えて、Hegel を皮切りに西洋哲学の古典を次々に再解釈する彼女の可塑的な読解は、エマソンが講演「アメリカの学者」“The American Scholar”で強調した「創造的な読書」と「創造的な執筆」の循環過程と重なり合う。

そのことを確認した上で、序章では最後に、エマソンに影響を与えた同時代のアメリカ北部の知識人、とりわけ彼と Transcendental Club の同僚でもあった Frederick Henry Hedge が、Immanuel Kant の思想を独自に再解釈した Samuel Taylor Coleridge のテクストを、いかにしてさらに創造的に読み直したかを跡付ける。エマソンが大いに参照した Hedge のテクストが可塑的、反基礎づけ主義的な視点から Coleridge の思想の再解釈を

行うものであったことを示すことで、環大西洋的な視座から、改めて「アメリカの超絶主義」の起源をエマソンが「円」（“Circles”）で描き出した広がりゆく円の軌跡と類比的な「創造的読解」の系譜の中で位置づけ直す。

第 1 章

“The Plastic Power of the Human Eye”: “The Animal Eye” and a Poetics of Ambience in *Nature*

「眼」や「視覚」のメタファーがエマソンにとって極めて重要なものであったことは、多くの研究者がすでに指摘してきた。Robert D. Richardson によれば、1825 年にリウマチ性の目の炎症から回復した直後から、眼の比喩はエマソンの日記における頻出のモチーフとなっていたという。とりわけ、1836 年の『自然』（*Nature*）に登場する最も有名な眼の比喩、いわゆる「透明な眼球」（“transparent eyeball”）は、同時代の政治的傾向であった拡張主義やマニフェスト・デスティニーと深く関係した表現として、その帝国主義的な側面がこれまでも広く批判されてきた。

しかし、本章は Jonathan Crary や Martin Jay による 19 世紀の視覚論に関する研究を参照しつつ、従来「理性の眼」(the eye of Reason)に対して軽視されてきた「動物の眼」(the animal eye)へのエマソン関心に着目することで、新たな解釈可能性を開くことを目指す。「動物の眼」と結びつく、自然や風景画を見つめるエマソンの「一瞥の美学」を、Timothy Morton の「取り巻くもの」としての自然をめぐる詩学（“a poetics of ambience”）と、Goethe の形態学に関する記述を経由しつつ確認したのち、この章では最終的に、「人間の眼の可塑的な力」（“The plastic power of the human eye”）が、支配的な『自然』の読みに反して、いかに重要な役割を果たしているかを再考する。

第 2 章　“A Zigzag Line of a Hundred Tacks”: Emerson’s Plastic Self in “Self-Reliance”

続く第 2 章、第 3 章では、自己と時間の関係性を主に掘り下げる。第 2 章では、1841 年のエッセイ「自己信頼」(“Self-Reliance”)を扱う。エマソンの自己信頼の思想は、まずはじめ硬直化した制度や慣習への主体的反感として現れる。ついで、過去や未来にとらわれず、常に「今、ここ」で起こる、さまざまな他者との出会いが議論の俎上に上る。そして、一貫性を無視してジグザグの航路を歩み続ける、現在の瞬間のみに集中する自己信頼のあり方が、こうした出会いから受ける受動的な影響に触発された変化をも含み込む形で、一つの理想として取り出される。

このような、瞬間ごとに現在をただ生きる理想的存在の象徴として取り出されるバラに関するエマソンの著名な記述は、最晩年に書かれ 1875 年に死後出版されたエッセイ「引用と独創性」（“Quotation and Originality”）における、一見すると自己信頼の思想と矛盾するような、伝統に対する負債を強調し、純粋な独創性を否定する記述へと迂回することで新たな読みの可能性をもたらす。最新の伝記研究を踏まえつつ、独創性をめぐるエマソンの思考それ自体が可塑的に変化を続ける様を、エマソン自身の記憶喪失及び積極的忘却と重ね合わせて再考することで、最終的に本章は、「協調の力」(“power of coordination”)にこそ独創性を見出す晩年のエマソンがたどった航路を、「自己信頼」における「ジグザグの航路」をめぐるメタファーと関連付けながら再評価する。

第 3 章　From “Genius” to “Practical Power”: The Logic of “Moods” in “Experience”

1844 出版の『エッセイ第 2 集』（*Essays: Second Series*）に収められた 「経験」（“Experience”）は、出版から二年前、1842 年に彼が幼い息子 Waldo を亡くしたという悲劇的な事実に明白に触発される形で書かれたという点で、エマソンのエッセイ全体を通じても特異な位置を占めるテクストである。本章では、まずこの Waldo の死との関係を足がかりとして、冒頭の詩にはじまり、全七節とエピローグからなる本エッセイにおいて、エマソンが嘆き、さらには「気分」(mood)や「気質」(temperament)といったより曖昧な情動全般について深めた思索を、近年急速に注目を集めつつある「情動理論」(affect theory)との関連を踏まえた上で、徹底的な精読を通じて跡づける。

その上で、章の後半ではエッセイ後半でエマソンに起きた変化を、子供への生成変化の過程として読み直す。とりわけ、自己と外部の関係性の変化を示すレトリックとして、エッセイ前半と後半でそれぞれ二度にわたり登場する、科学や生物学と関わる「レンズ」(“lenses”)や「胚」(“embryo”)のメタファーを、19 世紀当時の生物学における発達をめぐる議論の流れと関連させながら再考する。Malabou が Kant の議論から誇張的に取り出した「後成説」(“Epigenesis”)は、第 1 章で取り上げた Goethe 形態学を嚆矢として、その後徐々に影響力を持つに至った、先天的な遺伝のみならず、環境との相互作用が生物の可塑的な発達過程に与える影響に着目した議論である。最終的に本章は、エマソンの「胚」への言及が「後成説」の議論と通底するものであったことを示した上で、ジーニアスによって「嘆き」(“grief”)を「実践的な力」(“practical power”)へと転化させるエマソンの戦略を、懐疑論との関係性や、絶えざる変化の肯定という視点から捉え直す。

第 4 章

Conversation and a Poetics of Distance: Emerson’s “Friendship” and His Beautiful Enemies

博士論文の後半を構成する第 4 章、第 5 章、結論では、自己と空間の関係性に注目する。全 3 節から成る本章は、『エッセイ第 1 集』（*Essays: First Series*、1841）所収のエッセイ 「友情」(“Friendship”)を中心に、同テーマを展開した 「愛」（“Love”）、ならびに両エッセイの原型となった 1838 年の講義「心」(“The Heart”）を、主に「受動性」と「距離」の主題に注目しつつ論じる。

エマソンが友愛をめぐるエッセイ群において、他者との出会いの場として特に重要視している空間の一つに、「街路」がある。ほぼ同じ頃、Edgar Allan Poe もまた、ロンドンを舞台とする「街路」で見かけた多種多様な人々の姿や、老人と語り手の奇妙な関係を 1840 年出版の「群衆の人」(“The Man of the Crowd”）において描いている。第 1 節では、両者の作品の舞台である「街路」や、そこで他者へと向けられた二人の「視線」のイメージを、1840 年前後にアメリカの都市空間に起きた歴史的変化を踏まえた上で、主に書物をめぐる比喩に注目しつつ比較する。「読まれることを許さない本」の存在を強調し、「凝視」（gaze）に連なる徹底的精読、あるいは本の放棄へと向かう Poe に対し、友人を「あまり読み返さない本」に擬えるエマソンは、「一瞥」（glance）の視線にとどまり続け、本との一定の距離を維持しようとする。

この本との関係性は、エマソンがエッセイ「友情」で展開した「距離の詩学」とも明らかに響きあう。第 2 節では、街路や自宅における「他者 」(stranger)との「たいへんな出来事」とも喩えられる、トラウマをもたらすような「出会い」の瞬間を契機として築かれる、エマソンにとって理想的な友愛の関係性について詳述する。その上で本節は、継続的な「対話」を通じて相互に受動的に変化しあう、反領有的な関係性からなるエマソンの「距離の詩学」を象徴する「イラクサ」(“nettle”)などのいくつかの比喩を、Mikhail Bakhtin の対話理論及び、近年注目されつつある新たな精神療法であるオープンダイアローグの議論を踏まえながら再読する。さまざまな形をとる友人たちからの呼びかけをいかに聴き取り、そこにどのような「新たな言葉」で応答をなしえたか、という言語表現のレベルに収斂するものとしてエマソンの友愛観を捉え直すことで、「創造的執筆」と誤読を含む「創造的読書」のサイクルとして対話の過程を読み替える。また、そもそも「友情」を含むエマソンのエッセイにおける魅力的記述の多くが対話的な起源を持っていたことを、とりわけ重要な意義を持つ「美しい敵」(“beautiful enemy”)としての友人という比喩が、実際に執筆時の友人 Margaret Fuller との言葉の応酬なくしては生まれなかったという伝記的事実に即して確認する。

第 3 節では、Thoreau がデビュー作である旅行記『コンコード川とメリマック川の一週間』（*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*、1849）のセクション「水曜日」で展開した友情についての思考をエマソンと比較する。本節は、まずエマソンと Thoreau の友愛観の特徴をそれぞれ「対話」、「想起」として要約した上で、逆に Thoreau において「対話」が、エマソンにおいて「想起」が重要となる側面を、二人の関係性が生んだ変化の結果として最後に取り出す。Thoreau 死後の弔辞講演 “Thoreau”において、Thoreau が蜂などの動植物やモノともある意味で対話を行っていたことを指摘しつつエマソンは、講演の終盤、かつて自らが「友情」で否定した Thoreau の「こだま」（echo）となることで彼の声を響かせる。自らの過去の議論を部分的に否定するような変化を見せるここでのエマソンの姿勢もまた、一貫性や硬直性にとらわれることを避けつつも、決して自らの固有性を完全には手放そうとしない一種の「可塑性」に貫かれている。

第 5 章

“A Household is the School of Power”:

Emerson’s Domestic Economy in Representations of Space

本章では、比較的マイナーな講義 「家庭」“Home”を中心に、エマソンのエッセイや講義を横断的に扱いながら、それらのテクストに見られる空間の表象、とりわけ家屋を巡るそれを中心的に取り上げる。家と街路を隔てる扉のような、私的空間と公的空間の境界を巡るエマソンの文彩に注目するなかで、彼にとっての家政の問題を、ジェンダーや階級、人種の視点にも留意しつつ再検討する。

そもそも、エマソンが代表的エッセイ群を執筆したアンテベラム期のアメリカにおいては、市場経済の発展や産業化、所有権をめぐる法の整備などを通じて、1820 年代後半から用いられはじめた用語である個人主義の思想が、domestic ideology と結びつきつつ、とりわけ「所有」の側面を強調す

る形で広がりを見せていた。内側と外側を明確に区分する境界線が引かれたからこそ、そこには事後的に、集団から独立した個人の、見かけとは異なる内面が成立し、外部から囲い込まれた内部に存在するモノを所有する発想が生まれることとなる。例えばAlexis de Tocquevilleは、こうした公と私の峻別を前提とした個人、あるいはある価値観を共有し、一つの内側を構成するような小さなコミュニティにおける、「周囲から孤立し、引きこもろうとする」傾向にこそアメリカの特徴を見出した。またYi-Fu Tuanは、この周囲から孤立し自らに注意を向ける、自己の「内省」を可能とした条件である、さまざまな境界線の一つとして、当時の家屋、住空間の構造に見られる変化が単なる比喩にとどまらない意義を有していた事実を指摘した。

本章は、これらの19世紀アメリカをめぐる空間論を踏まえつつ、たとえばAmy Kaplanがほぼ同時代のBeecher姉妹に見出した“manifest domesticity”と興味深い対照をなしてもいる、内と外の分割を撹乱するようなエマソンの家屋、家庭に関連するレトリックと、家庭という親密圏において彼が実際に育んだ使用人や妻との関係性を巡る記述を同時に扱う。Barbara Ryanも示すように、当時のエマソンが思考実験においては積極的に取り入れた流動性を実際の日常生活で実験的に取り入れようと試みた際には、そこには常に妻Lidianや使用人たちの犠牲や抵抗があった。彼が家庭内で実験的に友人や使用人達と結ぼうとした理想的な関係性は、扉を開き共通の空間を共有することでこそ育まれるものであったが、家庭内に時に扉を閉めきり関係性を遮断する権力を握っていた存在は彼だけであり、その裏には人種やジェンダー、階級をめぐる彼の想像力の限界もまた確かに刻印されていた。

この点に留意しつつも本章は、可塑的に変化を繰り返すエマソンの自己観と並行するような空間の表象の最もラディカルな例を、1838年の講義「家庭」（“Home”）に見出す。最終的にこの章は、家庭の内部での人やモノとの関係性に加え、家屋そのものの枠組みに至るまで、あらゆる境界線を固定化から解き放ち、常に更新し直す運動の要素を孕んだ彼の文体が、自己を外界から隔離する「書斎」（study）ではなく、他者とともに語らう場としての「客間」(parlor)におけるFullerとの対話から触発されたものであったことを明らかにする。

結論

Emerson’s Plastic Americanism: The Community of the Eccentric in “The American Scholar”

結論部では、ここまで徐々に関係性の範囲を拡げつつ展開してきた議論の締めくくりとして、アメリカという国家の理想像と「考える人」(“Man Thinking”)としての理想の学者像を対置する講演「アメリカの学者」を扱う。この章はまず、NewfieldとBercovitchが1990年代に展開した、グローバリズムへと連なるリベラルな民主主義の立場からエマソンを批判的に読み解く研究を概観した上で、次にそれらに対するオルタナティヴな立場として、序章でも論じた、Cavellがほぼ同時期に展開した「エマソンの道徳的完成主義」に関する議論に再び焦点を当てる。Cavellは、エマソンの影響下で執筆されたFriedrich Nietzscheの記述に卓越を目標とするエリート主義的な完成主義を見出す、John Rawlsの立場へと反感(aversion)を向けることを一つの契機として、固定された目的・完成を

目指さない、より民主主義的な思想としてエマソンの思想を捉え直した。この必ずしもリベラリズムとは重ならない民主主義のあり方を、続いて本章は「アメリカの学者」の具体的な記述の中に探ろうとする。

「身近なもの、卑近なもの、平凡なもの」(the near, the low, the common)を讃えようとする同講演におけるエマソンのレトリックは、超絶主義者としてエマソンを捉えようとするような立場とは対立する、隣人との対話にこそ理想の民主主義への足がかりを見出そうとする彼の姿勢を示す。しかし、自らを可塑的な変化へと開く能力を万人に遍く認めようとするエマソンの文彩は、当時のボストンやコンコードの白人男性を中心とする知的共同体において、「身近なもの」や「平凡なもの」が結果的に権威や超越性を帯びてしまう危険性とも無縁ではなかった。

エマソンの記述を「近しさ」(nextness)の主題から再評価した Cavell の思想にも共通するそうした盲点を超えて、さらにエマソンの思想を広く現代にも通じる民主主義の思想として可塑的に読み直すため、続いて本章は、Branka Arsić がエマソンから引き出した「奇人」（the eccentric）の位置をめぐる記述に注目する。コミュニティ内部の規範や同調圧力には決して屈さず、しかし同時にコミュニティ内部の周縁にあくまでもとどまろうとする「奇人」たちは、迎合と反感(aversion)、内部と外部、家庭と街路、親密圏と公共圏、それらいずれにも完全には同一化しない中間地点で、目的なき完成主義の過程を歩み続ける。

最後に本論文は、エマソンを読む Cavell を読む Lauren Berlant による、親密公共圏における多様な他者との関係性をめぐる議論を補助線としながら、グローバリズムとアメリカ例外主義、「社会と孤独」（society and solitude）、柔軟性と硬直性といった対立を超えたユートピアのビジョンをエマソンの思想から読み取る。あらゆる人種・階級・性に属する「奇人」たちが、それぞれ「独立した国家」(“a sovereign state”)のように接しあうことで、そこにはじめて「奇人たちの共同体」(“The community of the eccentric”)が誕生する。エマソン自身の意図を超えて、19 世紀アメリカ北部における「身近なもの」や「近しさ」をめぐる無意識的に偏った視点をも問い直すこの「可塑的なアメリカニズム」の可能性を、エマソンのテクストによる呼びかけに対する現時点での応答として示し、暫定的な結論とする。

Keio University

Thesis Abstract

No.

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Ryohei Tomizuka

Title of Thesis:

The Moment of Transition: Plasticity in Ralph Waldo Emerson's Writings

変化の瞬間——ラルフ・ウォルド・エマソン作品における可塑性

Summary of Thesis:

This doctoral dissertation reexamines the ways in which the diverse relationships between self and others have been expressed in the works of Ralph Waldo Emerson (1803–1882). Based on the concept of "plasticity," which deconstructs the opposition between rigidity and flexibility, this dissertation seeks to illuminate Emerson's ideas as forming a plastic system that is not fixed in purpose, and that is constantly transforming. By showing that Frederick Henry Hedge's text was based on a plastic reading of Samuel Taylor Coleridge's thought, the Introduction reconsiders the origin of "American transcendentalism" from a transatlantic perspective. These continuous "creative readings" are compared to the trajectory of the widening circles Emerson himself describes in the essay "Circles" (1841).

Chapter 1 discusses the essay *Nature* (1836). Through Timothy Morton's concept of the "poetics of ambience" and Goethe's account of morphology, this chapter reevaluates how the "animal eye" and the "plastic power of the human eye" that are linked to it play an essential role, contrary to the dominant reading of *Nature*. Chapter 2 deals with Emerson's most famous essay, "Self-Reliance" (1841), alongside "Quotation and Originality" (1875). Inspired by the latest biographical research, this chapter traces the plasticity of Emerson's thinking on originality by linking it to the famous metaphor of the "rose" and the "zigzag line" in "Self-Reliance." Chapter 3 reads "Experience" (1844) in depth. Highlighting the scientific and biological metaphors of the "lenses" and the "embryo" as showing cognitive change through the turn, this chapter aims to capture Emerson's strategy of transforming the grief caused by his son's death into "practical power" by relating the power to the scientific debates on epigenesis in his time.

Chapter 4 consists of three sections, with each mainly centered on the essays "Friendship" (1841) and "Love" (1841), and compares Emerson's work to that of his contemporaries. Contrary to the narrator in Poe's "The Man of the Crowd" (1840), Emerson's essays are characterized by the "aesthetics of glance" in the first section. In the next section, the metaphor of the friend as a "beautiful enemy" as a response to Fuller's reprimand and the trope of the "nettle" compared with the "echo" are discussed as symbols of Emerson's aesthetics. The last section reviews the plastic shift to a metaphor of a renewed appreciation of the "echo" in the eulogy addressed to Thoreau after Emerson's interaction with him. Chapter 5 highlights the relatively minor lecture "Home" (1838) and the metaphors of space in Emerson's writings. Mainly from the perspectives of gender and class, this chapter shows that Emerson's ambivalent rhetoric of home was inspired by his dialogue with Fuller in "the parlor" as a place

to speak with others in contrast to “the study” that isolates the self from the outside world. The Conclusion covers “The American Scholar” (1837). By reviewing Emerson’s Americanism with Stanley Cavell’s concept of Emerson’s moral perfectionism, this concluding chapter offers a tentative conclusion and a direction for future research in the possibility of a more inclusive, plastic utopia.